仙台さんは目を覚まさない

静かだ。

いや、正確には物音はしている。

でも、静かだと思う。

さっきまで、冷却シートを貼れだとか、宮城が風邪を引いたら看病に行くだとか、普段言わないことばかり口にしていた仙台さんはすやすやと眠っている。

時間にして十五分か、二十分。

もしかしたらそれ以上かもしれないが、とにかく仙台さんが眠ってからそれなりの時間が経っている。そして、私の手は仙台さんに人質に取られたままで、解放される見込みがない。

ようするに、私と仙台さんは手を繋いでいる。

――落ち着かない。

様子を見に来たのはいいけれど、こんなことになるとは思わなかった。私は仙台さんとキスをするために彼女の部屋に来たわけじゃないし、彼女の我が儘をきくためにここに来たわけでもない。もちろん、手を繋ぎにきたわけでもない。

少しだけ。

ほんの少しだけ心配になっただけで、その心配はもう解消されたから帰ってもいいはずだと思う。でも、眠った仙台さんが私の手を握り続けているから帰ることができない。

「……仙台さん」

床に座ったまま、小さな声で呼んでみる。

待っても返事はない。

急に無言の空間に放り込むねんて無責任すぎる。こんなことなら、彼女のくだらない我が儘をきいている方が良かった。

布団を軽く引っ張る。

やっぱり反応がない。

手を軽く握ってみる。

握り返されたりしないし、起きたりもしない。

私は膝立ちになって、ベッドの上を見る。

仙台さんは眠っている。

冷却シートに触れてみると、冷たいような、そうじゃないような微妙な温度に感じる。新しいものに替えたほうが良さそうだけれど、替えたら目を覚ましてしまいそうだし、起こしたら可哀想だと思う。彼女が風邪を引いていることを考えると、良心が疼いて動けなくなる。

どうしていいかわからないじゃん。

繋がった手に力を入れると、仙台さんがぴくりと動いた。反射的に手を離そうとしたけれど、彼女の手を離れない。それどころかぎゅっと握られる。

私と仙台さんが分離しない。

手が熱い。

汗ばんでいる。

あまり気にしないようにしていたことが気になり始める。

私は繋がり続けようとする手を無理矢理引き剥がす。

仙台さんの口が動く。

むにゃむにゃと言葉にならない声が聞こえてくる。

仙台さんには「寝ないなら帰る」と伝えたけれど、眠ったあとも帰らずにずっといるとは言っていない。

だから、帰ってもいい。

というか、帰るべきだ。

渡さなければいけないもの渡したし、この部屋で私にできることはもうない。鞄からノートとペンを出す。ノートを一枚破って、仙台さんへ、と書いて手を止める。破った紙をくしゃくしゃと丸めてノートとペンと一緒に鞄に入れる。

書き置きなんていらない。

目が覚めて私がいなければ帰ったとわかるはずだ。

立ち上がり部屋から出ようとして振り返る。

ベッドまでそっと歩いて、仙台さんの額から冷却シートを剥がす。新しい冷却シートを箱から取り出し、彼女の額にそっと貼る。

「帰るね」

小さく声をかけると、むにゃっと仙台さんがなにか言った。